安寧

（撮影：前川英昭氏）

兵庫縣姫路護國神社社報
「安寧」第二十四号
発行所　兵庫縣姫路護國神社
〒六七〇―〇〇二　姫路市本町一一八
電話　〇七九―二二四―〇八九六
安寧（あんねい…世の中が穏やかで平和なこと）

ホームページアドレス　http://www.himeji-gokoku.jp/

英霊の言乃葉

妻への最後の手紙

陸軍大尉　樫野元作命

昭和二十年九月十八日
満州通化省濛江にて戦死
兵庫県出身　二十六歳

万里子　愈々時は来れり。
「特攻隊の歌」を想起し覚悟を新にすべし。
常々予が語れるが如く、万物凡て天御中主神に其の生命を発し天御中主神に帰へる。ことごとく神の御魂のまにまに生死を托しをれば決していらぬさがしらを以つて事態を糊塗するがことあるべからず。
愈々秋は来た、もはや云ふことなし。只々御身との浅からぬ縁に結ばれて過せし月日の幸を感謝するばかりなり。
「そのむかし千早の城に咲いた花
すめらみくにに永久に咲くらむ」

中略

一切の我慾　物慾を捨て　皇軍に殉ずべし
皇軍必勝は何人と云へども信じて疑はざるところなり。
勝利を信じ君國に殉ずべし
諦念、敗れて後生あるを最大恥辱とすべし、我々の幸は國の幸と共にあり、國家の栄光と共に我々の愛は益々純化されゆくを信ず。
御健康と御健闘を祈る。

（満州新京より引揚に際し）

終

（平成七年九月
靖國神社社頭掲示）

令和二年度春季例大祭斎行

（五月二日午前十時三十分）

五月晴れの中、新緑が萌える境内で恒例の祭典が斎行された。

本年は非常事態宣言発令に伴い、新型肺炎感染防止のため、ご遺族・来賓等の参列は控え、神職六名での厳粛な大祭であった。

定刻通り号鼓、斎館玄関から宮司以下祭員が本殿に向かって参進。本殿に拝礼後、修祓に続いて海川山野の神饌が供えられた。静寂の中、泉和慶宮司より英霊感謝の祝詞に加え新型肺炎流行鎮静祈願の祝詞を奏上。そののち玉串を奉奠し、御霊の平安を祈られた。献茶や詩吟などの神賑行事はなく、粛々と祭りが執り行われた。

宮司は祭典終了後「どんな時代にも国難と戦ってきた人々がいる。このような状況だからこそ、国のために努力してきた人たちを忘れないことが大事だという思いで祈った。」と話された。

崇敬奉賛会総会は書面決議で

新型肺炎の感染拡大防止により政府は四月八日緊急事態宣言を発出されており、事業報告、決算報告、事業計画、予算をご審議いただく総会は、開催の中止を余儀なくされ、四月六日、三木英一護國神社総代会長（崇敬奉賛会副会長）、阿比野剛崇敬奉賛会運営委員長の両名同席のもと会計監査（本庄監事、岡本監事）を行い、承認された。四月十五日、阿比野剛運営委員長の元、運営委員会を開催し、令和元年度事業報告、決算報告を決議し、併せて、令和二年度事業計画、予算を作成、その後四月二十日、正副会長会（三宅知行、釜谷研造、三木英一）を開催し決議された。

正副会長会で決議された議案書を役員に送付、書面決議を行い承認された。

〈令和２年度　予算〉

令和2年4月1日～令和3年3月31日

（収入の部）

予算項目	前年度予算額	本年度予算額	内　容
繰越金	3,747,283	3,240,961	
会費収入	2,800,000	2,800,000	●法人25口×5万円　●個人250口×3千円 ●終身会員10口×5万円 ●賛助会員30口×1万円
雑収入	452,717	359,039	新年祈願祭直会参加費　その他
収入合計	7,000,000	6,400,000	

（支出の部）

支出項目	前年度予算額	本年度予算額	内　容
神社奉納金	1,000,000	700,000	神社奉納金
事業費	1,900,000	1,800,000	英霊感謝の集い。講演会の実施・戦士の証言・社報2回発行及び発送・新年祈願祭直会、他の事業
事務費	100,000	100,000	奉賛会事務(神社へ)
会議費	400,000	400,000	総会・運営委員会
雑費	50,000	65,000	郵便振替手数料・銀行口座基本手数料等
予備費	150,000	135,000	
次年度へ繰越金	3,400,000	3,200,000	
支出合計	7,000,000	6,400,000	

〈令和元年度　決算報告〉

平成31年4月1日～令和2年3月31日　（単位　円）

（収入の部）

予算項目	予算額	決算額	比較増減	内　容
繰越金	3,747,283	3,747,283	0	
会費収入	2,800,000	2,268,000	▲532,000	●法人22口×5万円(110万円)●個人196口×3円・2口×1万円(60万8000円) ●終身会員8口×5万円(40万円) ●賛助会員16口×1万円(16万円)
雑収入	452,717	330,008	▲122,709	●戦士の証言参加費60名@500(3万円) ●新年祈願祭参加費60名@5000(30万円) ●受取利息8円
収入合計	7,000,000	6,345,291	▲654,709	

（支出の部）

支出項目	決算額	決算額	比較増減	内　容
神社奉納金	1,000,000	700,000	▲300,000	神社奉納金
事業費	1,900,000	1,897,962	▲2,038	●社報発行(安寧19、20号)30万2,400円●広報(社報発送・栞作成)41万980円 ●英霊感謝祭27万7,680円●戦士の証言講演会10万5,106円 ●新年祈願祭48万4,702円●即位礼正殿の儀奉告祭31万7,094円
事務費	100,000	100,000	0	崇敬奉賛会運営事務費　神社会計へ繰り入れ
会議費	400,000	345,405	▲54,595	総会・監査会・運営委員会9回
雑費	50,000	60,963	10,963	振替手数料,残高証明書、ＩＢ基本料
予備費	150,000	0	▲150,000	
次年度へ繰越金	3,400,000	3,240,961	▲159,039	
支出合計	7,000,000	6,345,291	▲654,709	

英霊感謝祭・英霊顕彰の集い

（八月十五日）

コロナ禍で迎えた終戦日でしたが、午前十時よりの英霊感謝祭は粛々と斎行されました。崇敬奉賛会常任理事の阿比野さんや木南さんのご協力により、新型肺炎感染予防や熱中症対策のための送風機や空気清浄機を提供していただきました。炎天下のなか、マスクを着用されて百数十名の方が参列され、泉宮司の祝詞奏上と共に、感謝の誠をご英霊に捧げました。正午には、東京で行われている全国戦没者追悼式の様子が境内で放送され、参列者全員で正午の時報に合わせて黙祷を捧げました。

英霊顕彰の集いは、三密を避けるために、参集殿二階でパネル展示のみの開催でした。テーマは「沖縄戦と島田叡知事」「日本統治時代の台湾」ということで告知しましたが、台湾については来年以降の展示としますので、引き続き来年もお集まり下さるようお願いします。参集殿二階の展示スペースには、人が途切れることがなく、夕方近くになっても若い人達が熱心に展示パネルを見ていました。感想で最も多かったのが、「兵庫県出身でこのような立派な知事がいたことを知らなかった」という内容でした。その他の感想も島田叡知事に関するものが多く、主催側としては島田叡知事のことが広く知られてよかったと思っています。これは偏に、奉賛会理事で加西市議会議員でもある深田さんが集めた島田叡知事に関する一次資料に依るところが大きいと言えます。ただ残念なことは、沖縄戦をマクロ的に見る展示を心がけたつもりでしたが、「沖縄戦は悲惨だった」「沖縄戦を繰り返してはいけない」という感想はあったものの、官民含めて日本が一丸となって沖縄を守ろうとして戦ったという感想が、殆どなかったことです。パネル展示だけでは伝わらないこともあるのかもしれません。今後の課題として来年以降に生かしたいと思います。また、「歌が歌えなくて残念です」という方もいらしたので、来年は是非、皆さんと一緒に歌いたいと思います。

ここで、八月十五日に神社を訪れた方の感想文を一部紹介します。

●英霊感謝祭は暑かったけど、気持ちが伝わりました。（十代男性）

●こういう体験が出来てとてもよかったです。（十代男性）

●日本の歴史を全く勉強してこなかったので、沢山の新しい発見があってよかったです。（二十代男性）

●沖縄戦の展示を見て沖縄に行ってみたくなりました。（二十代男性）

●沖縄戦の悲劇は二度とあってはならないと思いました。（三十代男性）

●沖縄戦や島田知事のことを今日初めて知りました、これから勉強していきたいと思います。（三十代男性）

●島田叡知事は勇敢な人だったことを知りました。同じ県民として誇らしいです。（三十代女性）

●島田叡知事が神戸出身ということを知らなかったです。（三十代女性）

●初めて参列しましたが、これから毎年来たいと思います。（四十代男性）

●兵庫県に島田知事のような立派な方がいらしたことに感動しました。（四十代男性）

●島田叡知事のことを展示で知ることが出来ました。勇敢で人格者であると感じました。（四十代女性）

●英霊感謝祭はもっと若い人の参列があるといいなと思うので、友人知人に声をかけていきたいと思います。（四十代女性）

●教科書では習わないことばかりで、とても勉強になりました。（五十代男性）

●コロナ禍でいろんな行事が中止になるなか、開催してくれて感謝します。（五十代男性）

●展示はパネルだけでなく、遺品の展示をされてはどうでしょうか？（五十代男性）

●終戦の日に手を合わせ、パネル展示で考える機会をいただき感謝しています。（五十代女性）

●島田叡知事のことを初めて知りました、来年からできる限り参加したいと思っています。（五十代女性）

●感謝祭での宮司さんの話がとても良かった。（六十代男性）

●兵庫県に護國神社があって誇りに思います。（六十代男性）

●沖縄戦を知れば知るほど胸にせまる思いがします。（六十代女性）

●「あの人の為なら死ねる」と言われる人に私もなりたい。（六十代女性）

●戦争当時の認識を深められて勉強になりました。（七十代男性）

●沖縄戦はよく勉強したが島田知事の偉大さを知ることが出来た。（七十代男性）

（文責　崇敬奉賛会常任理事　前川英昭）

「国難に立ち向かう」

兵庫縣姫路護國神社　宮司　泉　和　慶

新しい疫病を水際で食い止めることができなかった。本年一月末ごろからの武漢を発端とするこの疫病は何気ない日々を根本から変えてしまい、五十六年ぶりの東京オリンピックも延期を余儀なくされ、今もなお猛威を振るっている。いずれは過去のコレラや天然痘などのように鎮静していくのであろうが、感染者が増え続けており先が見えない。

地球上では人類は勝者のように思いがちであるが決してそうではないことを思い知らされる。草や木と人を同列にとらえていた私たちの先祖が考えてきた自然観があらためてよくわかる。この謙虚で慎ましい価値観が私たちの信仰や慣習を形作っている。

むやみやたらに他人に触れない、大声で話したりせず、口を押えて笑う、かつて、江戸末期や明治のころにやってきた異人が決して豊かではないが、礼儀正しく清潔な国民であると記した公衆道徳につながっていく。

村や部落の境目で他からの侵入を防ぐ神、邪悪なものを防ぐ砦の役割を果たすところからこの名がある塞ノ神、また道祖神、八衢比古神、八衢比売神、久那土神など、古来、結界の役割を果たす神々が数多く鎮座する。衢（ちまた）は道股であり道の分岐点、クナドは来な処で来てはいけないところを意味する。人口密集地からの移動制限や繁華街への自粛が要請されている。おそらくかつての時代も村をまたぐことや移動することを辻々の神の祟りがあるとして制限されたのであろう。

見えない大きな力への感謝と、恐怖に私たちの信仰や道徳感のもとがある。

自然災害が起こるスパンが短くなったような気がするが、歴史を見てもその都度に先祖たちは子孫に学びを残してきた。鎮静した時点で私たちは何を残せるか。私たちの取った行動は将来どう評価されるのであろう。

戦争の悲惨さや平和の尊さを伝える施設は全国に数多くあるが、護國神社の役割は何であろう。それはほかの施設ではない慰霊顕彰である。先の戦いで日本は敗戦した。そのことによって戦前を全否定して戦後が始まった。もちろん七年に亘る占領政策の影響が大きいがその後も今に及ぶまで国難に立ち向かった人たちを、「洗脳されて無駄死をした」と公言する人たち、マスコミ、書物で溢れている。

終戦後もフィリピンのルパング島で三十年間戦い続けた陸軍少尉の小野田寛郎氏は時の首相の「心ならずも散華された」という発言について「ああいうことを言われるとカチンとくる。もしも僕が死んでいたとしたら、死ぬつもりで死んでいたんです。心ならずも死ぬなんていうことはあり得ない」と不快感を示されていました。私はご英霊の代弁のように聞いた。

「命を懸けることによって、家族が、地域が、国家が救われるとの思い」「国難に立ち向かった思い」このことを顕彰することが護國神社の祭祀の意味である。良くご理解していただいている方々には当たり前のことだと思うが、靖國神社や護國神社が戦争を美化する存在とか、軍国主義の象徴のように話す人がいることも事実である。

「御遺族が少なくなって護國神社の祭祀も大変ですね。」と私に話す人がいるが、私には護國神社の祭祀が途絶えるときは国家がなくなったとき、日本という国家が消滅したときだと思われてならない。靖國神社や護國神社を支えるのは遺族だけではないと言い続けてきた。

戦後七十五年を経てようやく純粋に英霊に感謝する若者たちが増えてきているのを社頭で感ずる。明治のご維新から鳥瞰的に見ていかないと先の大戦は理解できない。崇敬奉賛会にはその役割を担っていただいている。コロナ禍中であるにもかかわらず今年の英霊感謝の日（八月十五日）には社殿前で多数の方々が黙とうをささげた。国難に立ち向かった人々のために。

「戦後七十五年を迎えて想う」

兵庫縣姫路護國神社　総代会　会長　三木英一

我が国は、昨年の四月三十日に上皇陛下が御譲位され、五月一日に新帝陛下が践祚され、「令和」へと御代替りした。天皇・皇后両陛下におかせられては、一連の重儀を滞りなく斎行され、日本国民挙げて祝福し、国家の安寧と世界の平和を祈念して新春を迎えた。

然しながら、想像もしなかった中国・武漢発の新型コロナウイルス感染拡大はパンデミックにまで到り、日本も令和の国難ともいうべき事態に陥り、安倍総理は全国に「緊急事態宣言」を発出し、国民に自粛を要請した。

戦士ともいえる医療従事者等の命懸けの対応と、国民の自制心のある行動により、危機的状況は一応収束して、五月二十六日に全国的に緊急事態宣言は解除された。

このような予想外の事態のため、当神社の五月二日の春季例大祭は、残念ながら神職のみにて斎行されることになった。遺族をはじめ崇敬者の皆様は、自宅にて慰霊の誠を捧げて下さったことと拝察する。十一月二日の秋季例大祭は、皆様の御参列のもと無事に斎行されることを祈念している。

今年は、日本国民にとって非常に大事な年であると私は思っている。大東亜戦争が終結して、七十五年を迎え、しかも日本国の正史『日本書紀』が編纂され、成立して千三百年、「教育ニ関スル勅語」が渙発されて百三十年の記念すべき年に当たっている。私は、「日本の古代の歴史や近現代史、戦後の教育の問題点や今後の教育の在り方、日本人としての生き方等について、深く学び、考える年にしたい。」と思って新春を迎えた。然しながら、私の知る限り、コロナ禍の影響と意識の無さにより、新聞、テレビ等のマスメディアは一切取り上げなかった。四月二十八日の日本国主権回復の記念すべき日についても然りであった。

この二、三ヶ月の自粛の期間、私は戦中・戦後の少年時代の生活、父をパラオで亡くし、日本が敗れた後の筆舌に尽くし難い悲しい、苦しい経験を想起した。有難いことに、神仏や御英霊の御加護を頂いて、今春満八十五歳を迎え、生かされて生きている。父の遺志を継いで教育の道一筋を歩み、現在、当神社の総代会会長、姫路市遺族会会長を務めさせて頂いている老生は、日本の国難に尊い生命を捧げられた御英霊の遺徳顕彰と、次世代の有為なる人材の育成こそが、自分の人生最後の使命であると決意している。そして、厳しい国際情勢を考える時、国難に備えて自衛隊の明記と緊急事態条項を含む憲法改正への運動に努め、世界の平和を祈念し、万物に感謝しながら、毎日精進していく所存である。

合掌（庚子盛夏　識）

令和二年十一月二日
午前十時三十分斎行

秋季例大祭について

本大祭は大変重要な祭典で在りますが、新型コロナウイルス感染症に係る諸般の状況に鑑み七月総代会で協議致しました結果、神事は厳修致しますが、総代及び各地区遺族会及び奉賛会員につきましては代表のみの参列と致します。

尚、姫路市民合唱団の奉納及び直会は中止と致します。春季例大祭に引き続き参列制限をさせていただき誠に申し訳ございません。

一般参列は、マスク着用、手消毒の上、他者との距離をとってご参列下さい。尚、ご高齢者、体調不良の方々はお控えください。

シリーズ 英霊の戦場（十五）

仁将と称えられた陸軍大将 今村均（いまむら ひとし）

晩年の今村均元大将

今回は連合軍からも仁将と呼ばれ、マッカーサーを「武士道の鑑」と感動させた将軍を紹介します。戦史研究者には「不敗の将軍」としても知られています。若い世代の方には是非覚えておいて頂きたい陸軍大将です。戦後冷静になって考察すると、戦争指導に種々の反省点が明らかになりました。又、今村大将にも「何故、開戦を止められなかったのか」との批判が指摘されていますが、軍の骨幹は「命令と服従」です。大将といえども例外ではあり得ません。

今村大将の大東亜戦争中と終戦後について簡潔に記述します、詳しく知りたい方には文末の参考資料（自伝）をお薦めします。その他、今村大将に関連する書籍も数冊発行されています。

第十六軍司令官（中将）として ジャワ島（インドネシア）上陸のエピソード

船団護衛の海軍艦隊司令官中村少将は護衛戦力（巡洋艦一隻、駆逐艦三十二隻）が不十分として増派を軍令部に要請していたが回答は増派不可、そこで今村中将は小沢海軍中将に直接要請、小沢中将は巡洋艦二隻を密かに船団の後方に続行させた。昭和十七年三月一日午前一時、上陸湾に突入時、双方の艦隊が激突したが、連合軍側の戦闘力が優り、味方艦隊の劣勢が目立ち始めた時、後方の巡洋艦から敵の艦隊や陸上砲台への制圧射撃が功を奏して、輸送船団は上陸予定海岸に接近、この時、軍司令官の乗った船が敵の魚雷艇から雷撃を受け撃沈され、多くの将兵と共に海に投げ出され、三時間余漂流中、午前四時半頃味方の救助艇に発見された。上陸成功は今村司令官の要請に小沢中将の適切な決断が要因であった。勝ち戦で敵戦力を侮る緩みが生じたのではと危惧。然し、上陸した日本軍四万人に対して、八万人の連合軍（米英豪蘭）が早期（十七年三月九日）に投降したのは「日本軍兵力を十万人以上と過大視し、日本軍の強靭性を恐れた事（心理戦）、住民が日本軍に協力、連合軍は寄せ集めの組織で戦力不足の上、指揮官に選んだ英軍中将が早々にビルマに逃走等で戦意を喪失してしまった。」と終戦後オランダ軍参謀が実態を大将に説明した。

軍政について

ジャワ上陸後から日本軍への住民の協力が積極的であり、この状況から占領地政策は天皇の内裁を受けた「占領地統治要綱」で行くと所属部隊に厳命した。この緩和政策にはシンガポール占領で住民から手痛い反撃を受けた体験から、大本営では強圧政策（日本軍の権威を認識させて住民を屈服させる）にすべきとの大勢であったため、南方軍や大本営から視察を兼ねて軍政変更を指導する幕僚が来島し、視察では問題が無いのに強圧政策に変更を要請した。今村軍司令官は「どうしても変更させたいならば、統治要綱の変更による命令か、軍司令官罷免を東条大臣に伝えよ」と断固拒否した。占領後間もなく隷下部隊がビルマ等に転戦が発令され、勝ち戦に目が眩み戦線拡大は国力を超えて危険である旨、南方軍司令官に進言された。独立運動家のスカルノ氏（インドネシア初代大統領、テレビで活躍中のデヴィ夫人は同大統領夫人）を解放し軍政の協力や独立運動の保護を確約して、相互の信頼関係を樹立した。投降した連合軍将兵は国際法に基づく処置やオランダ民間人の安全確保等、仁将の名に相応しい軍政を施し、占領地住民には終戦後までも慕われた。

第八方面軍司令官として ガダルカナル島将兵の救出

昭和十七年十一月八日、突然、新司令官に親補直ちに帰京せよとの電報を受け、陛下からガ島将兵の苦衷を救うべしとの聖旨を胸に、ラバウルに着任後、直ちにガ島の状況を把握、最初はガ島の戦況好転に尽力したが、撤退が決まった後は緻密で大胆な作戦により見事に生存者将兵一万名以上を救出した。山本連合艦隊司令長官が全面支援した。

（安寧十八号記載平成二十九年十月）

ニューブリテン島の死守（地図参照）

その後、ガ島救出将兵の戦力回復と守備範囲の島嶼防御に部隊配置等に尽力されていたが、島の西側に配備中の十七師団に熾烈な砲爆撃をもって米軍が上陸し、その目的はニューギニアとの間にあるダンピール海峡の制海・制空権確保であると判断、同師団を島中央付近に撤退させ、孤島自活対策を決定、特に糧食の自給自足方針を実行、兵士に一人百坪開墾目標を掲げた。幸い同島は火山島であり土地が肥沃で芋類は年に三～四回収穫できた。十八年五月陸

軍大将に進級。大本営も今村部隊の孤軍奮闘（玉砕）を予想し、昭和十九年二月参謀総長代理の幕僚が告別の意を込めて最後の来島をした。自活は将兵の努力により予期以上の収穫を挙げ一人平均三百坪を開墾し、終戦まで約七万名将兵の数ヶ月分の糧食・飲料水を常に確保し、現地住民には一切迷惑を掛けなかった。尚、日課は三分の一毎に陣地構築・訓練・農作業であった。地下壕は頑強で複雑に構築、武器・弾薬・その他の必需品を修理・製造でき、野戦病院と十分な医薬品の確保等を準備された。又、戦意高揚施策として新聞等を発行し、全将兵は難攻不落を自負し戦闘態勢を維持しつつ昭和二十年八月を迎えた。

八月十六日、敵豪軍から日本政府は終戦を受諾した旨を受電。「大本営から終戦に関する指令が無い限り、貴軍の上陸を禁止」する旨返電。同月二十日大本営より終戦手続き指令を受電。九月九日豪軍と終戦協定成立手続きを開始した。

戦犯として

海軍の将兵合わせて約十万名がラバウル豪州陸軍刑務所に収監された。将兵の帰還は昭和二十四年春頃と伝えてきたが、ソ連に抑留されている将兵の帰還が捗らず、輸送船のラバウル派遣が翌二十一年二月～六月と急遽決まる。最初の豪軍進駐軍司令官は日本軍に戦犯とされる将兵は居ないと本国政府に報告したが、任務解除され、交代した司令官が戦犯容疑者約七百名を指名し、それ以外の将兵を帰還させた。大将は部下の責任は全て指揮官にあると主張して、部下の戦犯裁判に抗議したが受理されなかった。大将も懲役十年の判決を受けた。昭和二十三年五月オランダ領ジャワの軍事裁判所に移され、ここでの裁判も現地と本国の判決が噛み合わず、然もインドネシア独立戦争が独立軍側に有利となり、スカルノ氏の介入もあり、無罪の判決。この間、大将に対する多くの非礼な待遇にも愚痴や抗議もされず、多くの裁判関係者に感銘を与えられたと伝えられている。大将は貴国（オランダ）も英米の強圧に伏して連合国の一員にさせられた悲運の政情に同情され、戦後の復興に邁進されるよう励まされた。

マヌス島刑務所

昭和二十五年一月横浜に上陸し、巣鴨刑務所に収容、旧部下が赤道付近のマヌス島で厳しい囚人生活をしているとの情報を得た大将はマッカーサーにマヌス島行を嘆願され、二十五年三月四日同島の豪海軍刑務所に収容された。多くの部下から歓迎を受け、炎天下で畑作業の日々を送られた。ここでも、受刑者の処遇改善に尽力され、刑務所所員から信頼される等尊敬を受けられた。刑務所閉鎖で昭和二十八年八月巣鴨に帰還した。

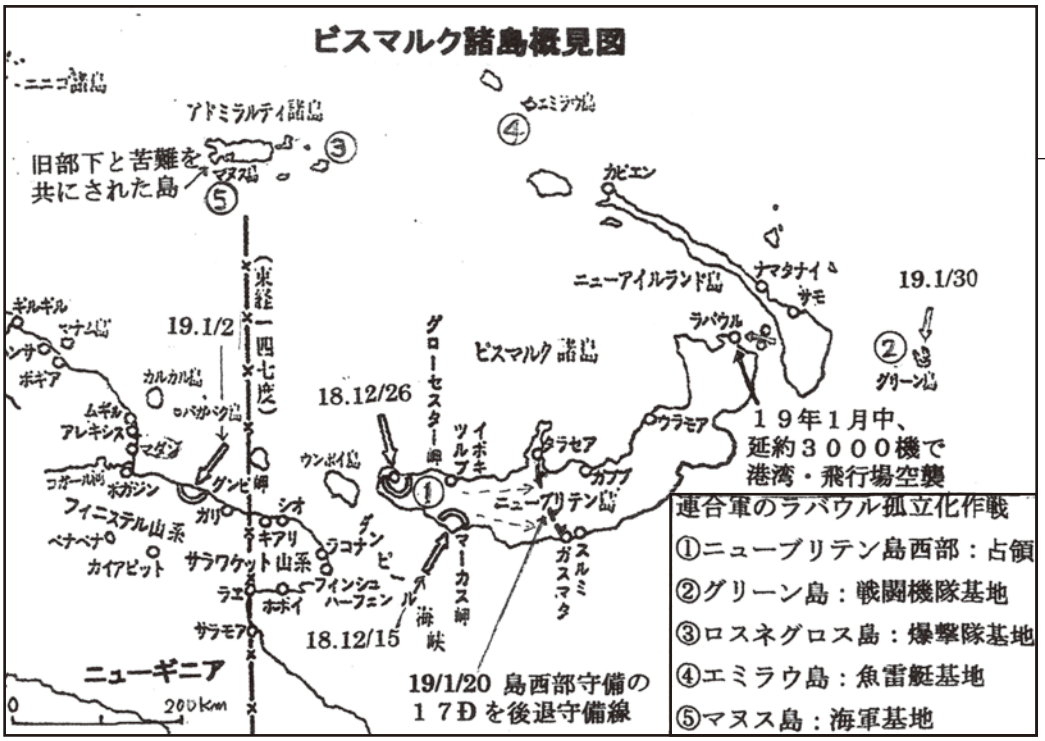
刑期終了後の人生

昭和二十九年、解放された後、自宅庭の隅に贖罪と謹慎の務めとして三畳間の小屋を建てられて朝夕戦没者の冥福を祈り、執筆や戦史編纂支援、時々乞われて「国の将来について」等の講演活動をされ、穏やかな日々を送られた。

昭和四十三年　心筋梗塞で慌ただしく戦友の住む世界へ旅立たれた。享年八十三歳。

参考資料　防衛省戦史叢書（大本営陸軍部編）「一軍人六十年の哀歓」今村均著

（文責　崇敬奉賛会理事　曽田孝一郎）



お参りに思う

田中　佐代子

姫路護國神社へ　毎年新年のご挨拶にお参りに行くことを行事としています

鳥居をくぐり参道の石畳をゆっくりと歩き木々が「おめでとう！」と言ってくるように　やさしくゆれている中　私と娘と孫達で　多くの人の奉納ちょうちんが「シャラシャラ」と　お話をしてるように耳に伝わってきます

私が亡き母に替って献灯させていただいた灯りが　かがやいて迎えられながら社にお参り「ひいじいちゃん　ここにいるの」「そうだよ　戦争に行って　亡くなられた　大勢の人が　ここ護國神社で祀られているんだよ」と会話しながら

「イの何番をさがしてね！」「あったよ」と返ってくる　奉納ちょうちんを写真に納め　この光景を　見るたびに　いままでの苦労のお礼と心の中で感謝し　孫達も思いおもいに手を合せお祈りをし心なごむひとときを過ごし　姫路護國神社に今年も無事にと　あとにしました

一句を書いて見ました

一　代替り　奉納ちょうちん　写メでみる

一　英霊燈　灯り燃ゆる　ちょうちんの色

一　笑顔して　巫女の姿で　ふるう孫

戦後七十五年が過ぎ　令和　新しい時代
姫路護國神社へ
平和で穏やかな年が続きます様に

合掌

寄稿文・俳句・川柳を募集致します